

【研究資料】

コロナ禍における能楽師の身体性とモチベーションの維持に関する調査

——伝統芸能が継承する知恵が健康増進に寄与する可能性を探る——

三浦 裕子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 文学部 教授
武蔵野大学 能楽資料センター長

森田 ゆい

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員
東京立正短期大学専任講師
特定非営利活動法人日本伝統芸能教育普及協会〈むすびの会〉事務局長・理事

大室 弘美

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員 武蔵野大学 客員教授

要約

2020年は全世界が新型コロナウイルスに苦しんだ年であり、未だにその脅威にさらされている。感染拡大を止めるために社会・経済活動が大きく制約され、今もそれが継続している。文化・芸術は「不要不急のもの」と言われ、3密そのものである演劇活動は中止・延期を余儀なくされた。伝統芸能もその例に漏れることはない。そのような状況下、感染拡大に細心の注意を払いつつ、能楽界は2020年6月末から公演を再開した。多くの能楽師も様々な形で活動を再開した。

今回、聞き取り調査を行った中堅の能楽師2名（シテ方喜多流能楽師・佐々木多門先生、シテ方観世流能楽師・鶴澤光先生）も当然、コロナ禍による困難に直面している。だが、高い身体能力と舞台に対するモチベーションを維持し、自身と弟子への稽古も継続している。

本論文の構成は以下である。「はじめに」で能楽界の現況、および両先生への取材の手順などを整理した。そのうえで、第1項で佐々木先生の発言（取材日、2021年3月8日）を、第2項で鶴澤先生の発言（取材日、3月12日）を掲載した。「おわりに」で聞き取り調査によって得た所感などを記した。

はじめに

2019年12月、中国武漢市に原因不明のウイルスによる肺炎が発生したという報道があった。その病原が「新型コロナウイルス」として日本で発表されたのが2020年1月9日（高橋浩一郎／原由美子「「新型コロナウイルス」はどのように伝えられたか」〔『放送研究と報道 december2020』〕による）。4月に第1回の緊急事態宣言が全国に発令され5月に解除された。一旦は感染者数が減ったものの、2021年1月に再び緊急事態宣言が東京などに発令され、3月に解除された。

日本における感染者数が増加していった2020年2月末頃から、様々な社会・経済活動が徐々に規制されるようになった。能楽界では3月頃から公演の中止・延期が相次いだ。素人弟子への稽古は能楽師の自宅および能舞台、あるいは公民館などの公共施設で行われることが多いが、その施設が使えなくなった。緊急事態宣言下でも当然、その状況が続いた。

宣言が明けた後、6月末から公演活動が再開された。当初は観客数を半数に抑える措置が取られたが、現在ではほぼ全席を使用することが認められるようになった。しかし、第2回の緊急事態宣言に伴い公演を中止する例も見受けられた。以上のように、能楽界の活動はコロナ禍以前に戻ったわけではない。コロナ禍を通じて強制的に変化する部分も少なくないと思われる。

そのような状況下、中堅の能楽師2名（佐々木多門先生と鶴澤光先生）に聞き取り調査を行い、高い身体能力や舞台に対するモチベーションをどう維持しているかをお尋ねした。この2名を対象にしたのは、佐々木先生がシテ方喜多流能楽師・男性・岩手出身、鶴澤先生がシテ方観世流能楽師・女性・東京出身と、比較するのに適当であるからと考えたからである。ただし両先生とも舞台と稽古に意欲的に活動している点では共通している。取材記事の最後にプロフィールを掲載しているので、それも参考にされたい。

取材の手順であるが、事前に質問事項（森田ゆい作成）を提示し、それに沿ってZoomによる取材を行った。その際、質問事項以外のことも多く語って下さった。これは、長い伝統を持つ能楽に精進している両先生だからこそ語ることができた内容と確信した。一般の人びとの日常の過ごし方にヒントを与えるところもあるかと思われ、それもひとつの「しあわせをカタチにする」ことに

寄与することになろう。そのような判断から、両先生のお話を紙幅の許す限り掲載することとした。なお、聞き手を三浦裕子・森田ゆい・大室弘美の3名がつとめたが、誰の発言であるかは明記していない。

1. 佐々木多門先生への取材（2021年3月8日）

2020年1月からの生活の変化について

佐々木 1月後半に雰囲気がいぶ変わってきたように感じていましたが、公演の中止はありませんでした。2月末の国立能楽堂主催公演（2月29日の特別公演）から中止が始まり、3月になると、私ども喜多流の財団（公益財団法人十四世六平太財団）で行っている事業や、仲間が催している色々なイベントが中止になってまいりました。しかし、3月22日に喜多流自主公演が催され、東京のお弟子の方への稽古はできました。ですから、生活自体が少し変わってきたというふうに受け止めておりました。

4月から私たちの本拠である喜多能楽堂が使えなくなり、自分たちの稽古や地方に出向いての稽古や催しが全然できなくなりました。そのため4月5月はずっと家におりました。6月になって喜多能楽堂が再開して、徐々に自分の稽古ができるようになりました。また東京のお弟子さんの稽古も再開しました。

流儀内で、若手の稽古をしなければならないという意見があり、青年たちの稽古能に対する稽古も6月から始まりました。一方、公演は6月もまったくありませんでした。7月8日に国立能楽堂が催した〈氷室〉から喜多流は公演活動を再開したという感じです。

喜多能楽堂では色々な催しをしています。従来であれば土曜日曜は予定が大体埋まっておりまして、平日に稽古をするスケジュールになっておりました。そういうことがなくなってしまったのが今年の4月5月でした。途方に暮れましたが、能楽界全体が同じ状況なものですから、緊迫感はあるものの皆、窮するという気持ちにはなっていなかったと思います。公演がキャンセルになり、その出演者に対して色々な調整をお願いする仕事があり、それが4月中続きました。ですから家の中にいるとはいいいながら事務仕事が大変に多かったです。

5月に入ると謡の稽古をしてほしいというお弟子の方のお申し出があり、

「メッセージ」を用いてのリモート稽古を一部の方にさせていただきました。

2回目の緊急事態宣言下では個人の主催公演を延期する例が多く見られますが、去年に比べれば公演数がだいぶ戻ってきているとは思いますが、しかし、まだ予断は許さないという感じです。

昨年4月5月は能楽堂での稽古はまったくできませんでした。師匠の塩津哲生先生がご自宅で稽古をして下さいました。そういう意味では気持ちが途切れなかったのと、常に課題と目標があったので、ブツツと切れたという感じはしていませんでした。むしろ今の2回目の緊急事態宣言のほうが、5月の公演を中止にするかどうか微妙な時期に入っておりまして胃が痛くなるような思いでいます。

— コロナ禍においてもご自身の稽古の頻度については従来の通りであったということでしょうか。

佐々木 師匠には、稽古は本番に近い状態のものを見て頂きますので、それまでに自分自身で重ねていく稽古が必要です。そこで、能舞台ではなく自宅の部屋の中で稽古をすることとなり、想像力を逞しくするにはとてもよい稽古だったかもしれません。しかし、舞台の感覚を捉える身体性が少し衰えたのではないかとこの恐れが常にありました。散歩をするなど体を動かすことを心がけてはいましたが、我々能楽師の身体性は稽古によって培われるものですから、普段稽古ができる幸せを本当に身に染みて感じました。

— 4月5月は事務仕事がたくさんあるという大変な時期だったのですね。

佐々木 キャンセルなどのつらい連絡を多くしなければならなかったのも、心理的に結構困りました。

— そういう事務連絡をされて落ち込むことはなかったのでしょうか。

佐々木 私の生活は家族が一番わかっているものですから、新たな日常というものを家族が本当によく支えてくれたという気がします。

— 5月に中止にするかどうか不安定な状況であるという公演はご自身が主催されるものですか。

佐々木 新聞社が主催する「仙台青葉能」という公演で、私は責任者として動いています。ですので主催者側が会議をして近日中に決めて下さると思いますが、中止になるかどうかの瀬戸際の状況です。

—能楽師ご自身が主催する催しですと、個人で決めることもできるかもしれませんが。しかし新聞社の主催であったり、会場が公共のホールであったりすると、個人の判断だけでは決められないことがあるのではないのでしょうか。

佐々木 感染のことも心配ではありますが、客席数を半分にするとなると収益面で厳しいことになります。お客様のことと自分自身のことを考えつつ、もう少し時期を待ったほうがいいのではないかという方向も出てくると思います。

公演を催すにはチラシ作成と配布、切符の販売などの準備期間が必要で、それが十分に取れるかどうかで違ってきますので、ここが悩みどころです。

—公演はどこで催すものなののでしょうか。

佐々木 その5月には宮城県の仙台市と登米市の登米と二ヶ所です。地方にも地域差がありまして、大丈夫だと思う感覚と少し閉鎖的に考えるところと様々です。

—出演者が東京から行くということに抵抗があるのでしょうか。

佐々木 すでに新潟や九州の公演に私どもも参っていますが、それは感じていません。ただ、現地の能楽堂などの施設がお客様に対して万全の構えができるかどうかが一番のネックになるようです。たとえば主催者側が新聞社ですと、公共性がありますので、さらに考えられると思います。

素人弟子への稽古方法

—「メッセンジャー」のソフトを使ってのお稽古は謡うたいですか。

佐々木 映像を使って舞を稽古する、音声だけを使って謡の稽古をする、このようなことを様々に試された方がいました。それを仲間内で検討した結果、一番やりやすかったのがFacebookに付属するメッセンジャーでした。音のずれがほとんどありませんでした。Zoomは設定が難しい方がいたようです。

謡の稽古でも映像が欲しいというご要望があって、本当に小さい画面ですけれども私の顔を映しながら謡の稽古をしました。音だけで捉えられてしまうものですから、息の使い方など謡の大事なところを伝えるのが難しかったです。謡の復習はいいのですが、新しいものを通信だけで教えることは、できていなかったと思います。

マイクとスピーカーがよくないといけないこともわかりました。聞き取りに

くい音などがありましたので。性能のよい機材が充実してくればもう少しやりようがあるかもしれません。

—地方のお弟子さんは、先生が実際にお見えにならなくてもリモートでお稽古ができる利点を感じた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

佐々木 グループ稽古の場合は場所によって6人以上集まると密になってしまいます。また広いお部屋ですと音が聞こえにくいことがあり、こういう状況下でのグループ稽古は難しいかなと思いました。

—リモート稽古は対面よりは劣るでしょうが、それでもお稽古をしたいという気持ちがお弟子さんにあったのでしょうかね。

佐々木 気持ちがおありになると、不十分な伝え方でもきちんと捉えてくれるということがあります。我々が本気で息を使うと結構響くのですね。私はマンションに住んでいるので、周りを気にしないと稽古ができません。公民館もまったく使えない状況でしたので、お稽古をする場所に非常に困りました。

—今でもリモートでお稽古をされているのでしょうか。

佐々木 地方にうかがう稽古を徐々に再開しておりまして、リモート稽古はしておりません。ただ地域によっては東京からの人を受け入れられないところもありますので、そういう地域の方たちには謡を吹き込んだテープをお送りするなどして何とか続けております。

—先生がお弟子さんたちのモチベーションを支えていらっしゃるのですね。

佐々木 逆のように思います。早くお稽古に来てほしいというお声や連絡を頂いたりするので、こちらが助けられていますね。

文化・芸術が「不要不急なもの」と言われることについて

—コロナ禍では文化・芸術が「不要不急なもの」と言われています。能楽もそう言われてしまうと思いますが、それについてどうお考えでしょうか。

佐々木 今まで能楽界の色々な方が支えてこられて、こういう事態になって能楽協会（公益社団法人。約1100名の能楽師が所属する団体）も随分と動いて下さったので、助かっている面が多いです。協会の結束が強くなったかもしれません。

能楽界の危機感を社会的に訴えることも必要ですが、コロナ禍によって能楽

が減びることは多分ないと僕は考えています。むしろこのような危機を迎えることによって、能楽を見たことがない人たちが映像配信によって見るチャンスにもなるのではないかと、時代のニーズに合った形を以前には作れなかったものが、作るチャンスになるかもしれないということを感じております。というのも様々な通信手段によって色々な方と出会うことが結構ありました。皆が何かを始めている時期だと思います。能楽師から配信するのは難しいのですが、それを支えてくれる人がいれば、もっといい形で能を伝えることができる、能の世界を外から見ると自分たちの思ったイメージと違う魅力を感じるということもあると思います。伝統芸能全体が沈みかかっているところですが、転機を迎えるきっかけになればいいのではないかと考えております。

——能楽協会が能楽界をしっかりと支えて下さっているのが心強いですね。

佐々木 能楽協会理事長として長らく率いて下さっていた野村萬先生（人間国宝。文化勲章受章）は色々なジャンルの方とのまとめ役もされておりました。現在の理事長が観世鍔之丞先生で、その下に有能な人材が大勢いらっしゃいます。そういう方たちが問題意識を持って動き始めています。非常に心強いことですし、私も何かお役に立ちたいと思います。

——喜多流においては、先生の師匠である塩津哲生先生をはじめ素晴らしい先生が揃っていますね。

佐々木 上の方たちがブレないのが大変ありがたいことです。しかし、コロナのことを考えると、ご高齢の方もいらっしゃるの、我々が守らねばならない、若手が動かなければならないことがさらに求められてくると思います。

一方、若手の能楽師ですと生活の基盤がまだ能にない人たちもいます。こういう方たちを能楽界全体で支える形を作らないと、能を継承していく人たちが外部から入ってこられなくなるのではないのでしょうか。そこがひとつの課題ではないのでしょうか。コロナ禍によってそれが明確になったように思います。具体的なことは存じ上げませんが、生活が厳しい人がいるということは三役（ワキ方・囃子方・狂言方）のほうから聞いたりしています。

映像の配信もこれから進んでいくのですが、著作権などの問題をクリアにするなどの課題が近々出てくると思います。ピンチがチャンスになる、そういうふうに考えたいですね。

——公演の中止や延期が決定すると、それに向けて準備していたと思いますので、気持ちが沈んでしまうことがあるのではないのでしょうか。

佐々木 喜多流全体で主催する事業を延期する場合、あまり問題を感じませんでした。私は東北出身なもので地方公演にも色々と携わっていて、コロナ禍の前から地方の文化事業が危機的状況を迎えておりましたから、自分にとっては1回1回が非常に重みのある、大事にしたい局面でした。

ですからコロナの状況はありますが、時間を少し止めたいと思うような、何ともならないもどかしさは、どうしようもなかったですね。自分だけでやることではないですから、協力をお願いしている方々に、中止または延期とさせて頂きたいと申し上げるのが、辛かったですね。それぞれの方の生活や思いがありますから、本当に申し訳ないと思いました。どちらかというとも舞台を踏めない辛さよりも、催しに携わる人たちが参加する場を失ってしまった辛さのほうが勝っていました。

しかし、能楽師のいいところなのではないでしょうか、普通ですとキャンセル料を考えざるを得ないのですが、「事情はわかっていますのでいりません」「お互い様です」と大勢の方が言って下さいました。大変ありがたかったですね。ですから昨年はこの5月の仙台青葉能ができなかったのも、今年は何とかやりたいという気持ちもありつつ、地元の主催者のお気持ちもわかり、これは責任者の愚痴です。感覚的に言うと今は東京の公演が曲がりなりにもできていたりするので、そういう中で中止を言うのは苦しいですね。

——公演を催すことができても、公演後の2週間ぐらいは感染者が出ないかどうか、主催者は新たな悩みを抱える時期を過ごすと聞きました。

佐々木 心配になられるお客様もいらっしゃいますから、それに対応するために受付をどうするか苦労するところです。文化庁からの通達が能楽協会を通じて下りてくるので、それを参考に自分たちで考えたところもあります。喜多能楽堂の場合、ある時間になったら状況を見て消毒をするようにしています。

お素人会ときには楽屋が3密にならないようにする工夫などを、皆で知恵を出し合いました。普段開けないところを開放して緊急的な対処などをしました。たとえば、地下に稽古舞台があり普段は玄人だけが使う場所ですが、そこを開放して敷物を敷いて、お素人の方の支度に使って頂いたりしました。

また座席を半数にするときは、その間隔や配置を考えなければいけません。喜多流の催しなどでは、お手伝いをしたり一緒に方法を考えたりしました。

去年の最初の頃は風評被害が出ないようにすることに対して少し過敏になっていたと思います。岩手県で感染者がゼロというときも、岩手県内で相当過度な感覚が漲っていました。能楽界の楽屋にも同様な雰囲気があって、喜多流が第1号になってはいけないということを暗黙に考えていました。考え得ることはすべてやったと思っております。

喜多流自主公演の1年延期について

——喜多流の場合は自主公演を思い切って1年延期されましたね。昨年7月ぐらいから公演を再開した流儀が多かったようですが。

佐々木 流儀を動かしている方たちの大英断だと思います。延期した4月5月の公演を11月12月あたりに振り替えることにも不安がありましたので。他流には他流のお考えがあり、なるほどと思うところもありました。喜多流としては思い切って1年延期してしまったほうがいいとなりました。上が決めれば、皆、それに従って対処するということです。宗家預りの友枝昭世先生が責任を持つからと言って下さって、下の者が実際的な作業などを少しさせて頂きました。喜多流は本当に素晴らしい流儀だと思っています。

——喜多流の自主公演は毎月定期的に催しているものですね。それがなくなってしまったことで、舞台に対する感覚や身体性に関して心配に思うところがありませんでしたか。

佐々木 流儀を上げての本舞台が月に一度あることは、できない状態になっている今思えば、折り目折り目をきちんと付けていたということです。そのリズムがなくなってしまって、季節がいつの間にか終わってしまったような感じがします。これから、何かを失ってしまった感覚を感じると思います。今年4月の自主公演が始まってから皆、何かを思い出すことになるのでしょうか。

我々はひとつの舞台が終わった後に反省会をすることが多く、ただの飲み会になることもあります。舞台を思い返す場がないと積み重ねるものがない感じがして、つまらないですね。その分、できるようになったときに、溜めていたものを反動で返すようなことが出てくるのではないかと思います。きっとよ

い舞台がたくさん行われると思います。

—能楽師の方は非常に厳しい訓練を積んでいるから、コロナ禍の困難にも折れない精神力を持っているのでしょうか。

佐々木 持病のある能楽師の方が元気になられたケースが結構ありまして、よい休養になったということもあるのではないのでしょうか。我々の世代は稽古と舞台に明け暮れる毎日でしたから、今のほうが健康的な生活を送っていて、体の調子がいいと思うことがありました。ただし、舞台に関しての調子がよいかどうかを確認する場がないのですが。

コロナ禍による空白期間について私どもは取り戻せると思っておりますし、休息をもらったことでプラスに作用するのではないかと思っています。今までの状況を強制的にリセットする機会を与えられた、そのように前向きに捉えたいと思います。

—自主公演が再開された時点で、今までと違うところを実感することがあるかもしれませんね。先日、お舞台を拝見していて、地謡がまとまりにくいのではないかと感じることがありました。

佐々木 地謡を離して座るようなことがあります。ある時期はアクリル板を置いていたこともあり、舞台全体の一体感が失われていたこともありました。そういう状況で普段通りに演じることは非常に難しいことがよくわかりました。

助成事業への参加

—東京都の「アートにエールを」などの助成事業に応募する、または参加されましたでしょうか。

佐々木 岩手県のほうの助成を受けてワークショップや発表会をしたことはあります。仙台青葉能などの大きな公演について客席数を半数にする場合は、やはり助成を受けないと催すことが難しいので、そういうものにも申請をしました。また、例年のことですが、公益財団法人 十四世六平太財団が助成を受ける申請などもしております。現在は、伝統芸能自体が助成を受けないと公演ができないこともありますので、助成ありきというところがあります。

—コロナ禍での映像配信に関する助成事業に参加したことはありますか。

佐々木 公演の助成を受けるに当たって映像の配信が条件になっているものが多いので、映像に関してのことを考えていけなくなってきました。

佐々木多門（ささき・たもん）

シテ方喜多流能楽師。1972年、佐々木宗生の長男として岩手県盛岡に生まれる。初舞台は〈鞍馬天狗〉花見（3歳）。喜多流宗家内弟子を経て現在、塩津哲生に師事。〈猩々乱〉〈道成寺〉〈石橋〉〈翁〉などを披く。「燦ノ会」同人。喜多流職分会同人。日本能楽会会員。早稲田大学文学部卒業。武蔵野大学客員准教授。

2. 鶴澤光先生への取材（2021年3月12日）

緊急事態宣言が発令されるまで

鶴澤 新型コロナウイルスについての報道を初めて意識して見たのが、新幹線に表示されるテロップのニュースでした。2020年の1月後半だったと思います。その頃はまだ対岸の火事のように思っていましたし、仕事のキャンセルもありませんでした。

少し話がそれますが、その頃、中国人の学生が能の勉強に来ていました。アメリカの大学に留学している学生で、1年半ばかり2月頭まで近所に下宿して、毎日、わが家まで通ってきていました。その前は浅草の外国人用シェアハウスに泊まっていて、中国の親御さんから、そこは中国人が多いから引っ越すようにと言われたそうです。親御さんがすごく心配していることを聞いて、中国の雰囲気の変化を肌で感じ、これから大変なことが起きる予感がしました。

2月前半はまあまあ仕事がありましたが、半ば過ぎから3月の仕事がなくなり始めたように記憶しています。そして3月に入ると雰囲気が一気に変わって、4月以降の仕事がどんどんキャンセルされるようになりました。

3月13日の鍔仙会定期公演で観世鍔之丞先生（鍔仙会理事長）が〈山姥〉を舞われました。そのとき既に、公演を催しているのかという微妙な空気があったように思います。当然、チケットを買っていたのに来なかったお客様もいらしたようです。同月の25日には青山能で私が〈桜川〉のシテを舞うことになっていました。会場の鍔仙会能楽研修所の客席は200人ぐらいのキャパシテ

イーです。決して広い会場ではないので、果たして公演を催しているのかという議論がかなりされました。ただ銚仙会には大きな換気扇が5台もあって、寒いぐらいに換気ができます。最終的に開催することが決まり、私はチケットを積極的には売らないようにしました。結果、当日のお客様は100人ぐらいでしたでしょうか。公演当日の朝、お弟子さんの看護師の方から「散々迷いましたが、今日の公演に行くのは難しいです。職場から禁止されてはいませんが、自主的に外出を控えたいと思います」というメールを頂きました。それを見て、この開催がギリギリの状況であることがわかりました。

ちょうど青山能を催しているときに、小池百合子東京都知事が「ロック・ダウン」という言葉を使った会見をなさいました。そこから完全に流れが変わりました。「演能を何とかやっ払いこう」という意気込みが一気に萎んでしまった気がします。シテを終えて戻ってきたら世界が一変していたみたいで、とても印象的でした。

——3月の青山能では、銚仙会として演能活動を続ける意味を文書にて表明されていました。

鶴澤 だからでしょうか、客席にも謎の覚悟のようなものを感じました。その頃にはどの公演もお客様が50%ぐらいしかいらっしやらなくなっていました。ですから、消毒を徹底し、お客様のお名前・ご住所と座席位置をお書き頂くような対策を講じて、何とかやっ払いいけないかなという空気でした。

しかし、実際はそうはいかず4月5月の仕事はほとんどなくなりました。6月から銚仙会は稽古能を、7月から定期公演を再開し、その頃から仕事が少しずつ戻り始めました。でも、2020年の予定の半数以上が既にキャンセルか延期になっていました。ですので仕事が始まった、と言っても実際には始まっていない感じもありました。

——そういうときにモチベーションを維持するためにどうされましたか。

鶴澤 例年、7月後半に川崎能楽堂が子ども向けの「夏休み能楽体験・鑑賞教室」を催しており、それは開催される予定でした。同能楽堂で3月に催すはずの「川崎市定期能」が9月に延期されることもわかっていました。また9月に茨城県日立で〈石橋〉を演じる予定でした。このように抱えているものが結構ある状態でしたので、そのつもりで稽古をしていました。9月の〈石橋〉は実

際は今年の2021年に延期になりました。そうなる予感もしつつ、体を鍛えなければならぬ曲でしたので、暇になったこともあり、ほぼ毎日、母親（シテ方観世流能楽師・鶴澤久）と一緒に稽古をしていました。それプラス他の曲も稽古していました。

2ヶ月間、舞台の仕事が何もないことが今までなかったので、ここまで稽古ができるのは逆にいいことなのではないかと受け止めました。経済的なことを考えたら先行きに不安がないわけではありません。

私たちが何であまり折れないのかを母親と話し合ったことがあります。我々は常々他人と自分を比べることに興味がなく、つまりは何が起きても精神的なスタンスがあまり変わらず、だから安定しているのではないかという結論に達しました。また、仕事なくなることがあるかもしれないということを常に想像していたということもわかりました。

この2ヶ月がないまま慌ただしく本番を迎えたとしたら（本来は迎えるはずでした）、それでよかったのだろうか。忙しい中で必死に時間を見つけて稽古するのが当たり前だったが、それは正しいことなのだろうか。丁寧に物事をやるのがとても大事なことで、そのために時間を費やすのが基本なのではないか。そういうことを去年の緊急事態宣言中に一番考えました。

昨秋に仕事が元に戻ってきたときに、そのペースを掴めず体調を崩したりしました。それまでよく寝ていたのが睡眠不足になり食生活も崩れて、早速に風邪をひきました。この頃は別として、コロナ禍の間はほとんど風邪をひいたり体調を崩したりしませんでした。よく寝ることとマスクをすることが大事で、今までは自分をコントロールできずに風邪をひいていたことがわかりました。夜の会合がなくなり、ほぼ毎日自宅で食事をするようになったのも健康によいと思いました。そういう意味で生活を組み立て直すよい機会になりました。

—ご自宅に舞台があること、そしてお母様と話し合い稽古する時間が十分に持てたのも、よいことだったのではないのでしょうか。

鶴澤　すごくありがたいことでした。家族の理解がなく、稽古すらしづらかったという人の話も聞きましたので、本当に恵まれた環境にいるのだなと思いました。時間ができたので、稽古するだけでなく能の話がたくさんしました。この状況下でも仕事を理解して応援してくれる家族がいることは本当にありがた

かったです。稽古する場所があったのも助かりました。

緊急事態宣言中、鍔仙会は基本的に閉鎖していましたが、当時私は管理委員でした。だから、舞台掃除くらいはせねばと、時間の空いているときにお掃除に行っただけでこっそり稽古したりしました。鍔仙会は玄人の稽古のためにちょこちょこ開館してくれて、それも大変ありがたかったです。

—それでは昨年に落ち込むことはあまりなかったのですね。

鶴澤 中止になった定期公演があって、そこで能が舞えなかったことは悔しかったです。折角ずっとお稽古していたので、家の舞台で発表とまではいきませんが、母に謡ってもらって舞いました。このようなことはありましたが、落ち込むということはありませんでした。一家の長として家族を養う立場ではないので、能天気と言われればそうなのだと思います。

—3月末に〈桜川〉を舞われた後の2週間ぐらいは、感染者が出たらどうしようかと心配されたのではないのでしょうか。

鶴澤 はらはらしました。先日催した鶴澤久の会（2021年1月17日）と比べて、当時の客席はもう少しザワザワしていたと思います。当然皆さんマスクは着けていられるのですが、お客様同士で挨拶するような空気があったりしたので心配でした。劇場でのクラスターなどが起きていた時期でしたし。まだその頃は何がダメで何をすれば大丈夫というデータが上がっていなかったのも、ひたすら不安でした。

—青山能の主催者は鍔仙会なのですが、先生もはらはらされたのですね。

鶴澤 ご高齢のお弟子さんや知人友人が来てくれたので心配でした。でも、客席があまり混んでいなかったのも、大丈夫かなとも思いました。能楽界ではまだクラスターが発生していなかったのも（今でも発生していない）、第1号になってはいけないというプレッシャーもありました。

—公演が延期・中止になって、舞台感覚に変化がありましたか。

鶴澤 月に10番舞う役者と年間に数番舞う役者ですとおのずと状況が違ってくるようにも思います。しかし、日々稽古をしていれば、1～2ヶ月程度のブランクであれば、シテを舞うことに関する変化はそうないような気がします。

仕事が再開されて一番初めに違和感を抱いたのは「楽屋」です。人との関わりやポジショニング、時間のない中でミスをしないように働く現場感覚が結構

はやくダメになるような気がしました。日常において実技の稽古はしますが、楽屋での振る舞いは稽古できません。ですので、久々に楽屋で働くことになった際、集中力が切れて何かミスをするのではないかと少しドキドキしました。今までだったら何の心の準備をしなくても十二分にできていたことが、今日は何をやるか、起きうるトラブルを全部列挙しておかないと不安に感じたりしました。しかし、舞台は楽屋から作っていくものです。ということは、舞台にも当然影響が出ているのでしょう。これはシテ方だけのことかもしれません。

——不安を感じたとしても実際に失敗することはなかったでしょう。

鶴澤 表には出ないけれども自分の中でミスをしたと思ったことはありました。一瞬、手間取ったというようなことですね。本当に小さなことですが、私にとっては大きいことです。昨秋には公演がかなり復活して勘が戻ってきたのですが、今年に入っての公演が少なく、久しぶりと思うだけで緊張します。もともとの私はマイペースなのんびり屋なので、思考のスピードが鈍くなったのを自分でネジを巻くようなことがありました。今は大丈夫だと思います。

——2～3秒ぐらいタイミングがずれるということでしょうか。

鶴澤 もっと短いことです。

このようにまず違和感を抱いたのは楽屋のことでした。次に舞台上で久々にお囃子とともに謡うときはさらにドキドキしました。舞うこともそうですね。とにかく現在は、今まで以上にきちんと準備をしていくようにしています。ブランクのせいで何かしらのバグが起きる可能性を、皆さんも心配しているのではないのでしょうか。一方で、自分勝手に不安になっているだけで、それを掘り下げる必要はないとも思います。しかし現場感覚は所詮、現場にいないとダメですね。3ヶ月離れていれば、現場感覚が鈍くなって当然です。だから自分を信用しないで、3ヶ月の穴は大きいと思って準備する必要がありますね。

緊急事態宣言が出て変わった日常に、体幹トレーニングを始め、それが習慣化していることがあります。お尻がとんがってきたこと以外に何が変わっているかはわかりませんが、今でも続けています。

素人弟子の方への稽古、大学でのオンライン授業

鶴澤 今だから言えることですが、第1回の緊急事態宣言中、わが家の舞台は素人のお弟子さんに対してずっと門戸を開けていました。「わが家は暇になりましたし、常に開いております、対策もしております、来たい方はどうぞ、こちらから来るなどは申しません」というスタンスです。さすがにご遠方のお弟子さんはいらっしゃいませんでしたが、ご近所の方たちはちょこちょこ来て下さいました。ソーシャル・ディスタンスを取り、玄関に網戸を取りつけ、窓を開け放して、お稽古しました。玄人としての舞台の仕事はなくなりましたが、お弟子さんがいらして下さったりと、ほかの変化があまりなかった、というのもよかったのだと思います。

また Zoom、Skype、LINE などを利用してリモートでのお稽古もしました。先ほどの留学生はアメリカに戻ったあと Zoom でお稽古していました。そうこうしているうちに6月ぐらいからお稽古に来て下さる方も多くなりました。

Zoom が難しいようなご高齢の方は、舞を録画したレッスン・ビデオを作って送るようにしました。大学の授業でやっていたことを応用したものです。
——大学の授業も準備が大変だったのではないのでしょうか。

鶴澤 オンライン授業の準備のためにパソコンにかじりついて毎日泣いていた、というか、夜に寝られなくなる状態がしばらく続きました。緊急事態宣言が発令されて舞台の仕事がなくなったのは事実ですが、宣言下の後半は、大学のオンライン授業のためのパソコン業務に追われていました。ノイローゼ一歩手前で、今思い出しても大変に辛かったです。もしかするとパソコン業務に気を取られていたから、他のことを辛いと思わなかったのかもしれませんが。

——オンラインで実技を教えられたのでしょうか。

座学や実技などに関する動画を作成し、それを YouTube に非公開でアップしたものを学生に見てもらうようにしました。学生からフィードバックしてもらうのが理想なのですが、様々な環境から声を出すことなどのできない学生がいます。ですので学生の実技の映像や音声を私に送信してもらうことは控えました。かわりに学生の質問に答えるようにしました。幸いなことに7月頃から対面の授業が可能になりました。登校できない学生には、授業を録画したものを見てもらうようにしました。

オンラインと対面との指導効果の差は当然あります。動画では奥行がわからないので、正方形の舞台のどの位置に立っているか、適正な位置がどこかなどがわからなかったようです。型を動画で教えるのは難しいなと思いました。

謡の場合、対面ですと、目の前で私が手を動かして旋律の形を示すような稽古ができます。しかし、画面越しですと、私の手を見ず謡本ばかり見てしまうことがあったようです。でも、オンラインで謡を稽古することは、やりようによってはできるかもしれません。

型の場合、基礎的な型の練習でしたら、ある程度のところまではできるかと思いました。団体稽古は難しくても、個人稽古だったらできると思います。

——最初に話されていた留学生の方の場合、舞台感覚を掴んでいたもので、オンラインで教えることが可能になったのではないのでしょうか。

鵜澤 教えやすかったですね。ただし、謡本に節の補助記号などをその場で書いてあげることができなかつたので、私が書いたものをPDF化して送ったりしました。でも、そんなに苦労しませんでした。彼女に基礎力がついていたので、からだだと思います。

一般的に、オンラインでは対面より丁寧にサポートする必要があると思います。たとえば、普段のお稽古ですと私が謡った後、鸚鵡返しのように謡ってもらいます。オンラインですとそれだけでは足りないもので、事前に謡の録音を送って、それを聞いてもらったうえで、オンラインのお稽古をしました。このように予習と復習をこちらでサポートするようにしました。

とくに、初めてお稽古する曲の場合、私が謡った後、鸚鵡返しで謡ってもらっても、イメージや音の高さが違ったりすることがあります。それならば携帯電話のボイスメモで録音したものを事前に送り、それを聞いてもらってからお稽古するほうが百倍はやいと思います。文明の利器のお陰です。

——オンラインでのお稽古には限界があるものの、工夫する可能性が広がったということですね。

鵜澤 対面のお稽古を休まれる場合でも、お家で聞いておいて下さいとって謡の録音を送ってあげることができるようになりました。お休みを無駄にしないことで、取りこぼしがなくなりました。中には、これを機にiPadを購入した、スマートホンに買い替えた、というお弟子さんもいました。昔は稽古を録

音するとは何事だ、録画なんてもってのほか、というのが当たり前でした。しかしこのコロナ渦ではそうも言ってもらえない、使えるものは使っていこうという雰囲気になったのではないのでしょうか。

人それぞれの「不要不急」

——文化・芸術が「不要不急」と言われることについて、どう思われますか。

鶴澤 私自身が舞台芸術で生計を立てている者なので、中立の立場で考えることができません。ですから、発想を変えて、自分が好きな文化に対してどう思っているかを考えてみました。

私の場合、舞台を見に行くのは好きなのですが、映画やテレビドラマなどは不得意なのです。でも不思議なことにドキュメンタリーは平気なのです。ドキュメンタリーと同様、生の舞台であれば、どんなに深刻な内容であっても最後まで見ることができます。コロナ禍で舞台を見に行けなくなったのは辛く、改めて生の舞台の価値を感じました。

まったく自分の身勝手な体験しかお話できないのですが、生の配信の動画を視聴しているうちに集中できず眠くなったりしました。「生の舞台の力」とは何なのだろうと思うと、目の前で起きていることを、奥行と四方八方での出来事に注意しながら見ていく感覚かと思いました。映像の中の二次元の画面とは違うのではないのでしょうか。私のような者にとって、生の舞台を見ることは生きる糧になっています。そういう意味では不要不急ではないのですが、他の方はそうではないのかもしれませんが。

——人によって不要不急のものが違うということですね。

鶴澤 一方で生の舞台だけでやっていくのは、このような状況下では難しいことも感じてはいます。録画について色々と実験的な試みが行われているので、それが知識として蓄積され、能楽界全体の財産になればいいと思います。皆が規制なく個々に自由に挑戦したものが全体に還元されることがあったらベストではないかと思います。

助成事業について

——光先生の場合、東京都の助成事業「アートにエールを」に参加されて動画

の中で〈石橋〉の獅子をお母様の久先生と一緒に舞っておられました。他に参加されたプロジェクトがありましたか。

鶴澤 観世鏡之丞先生が能〈弱法師〉を演じて、お姉様で女優の観世葉子さんが、三島由紀夫の近代能楽集『弱法師』の朗読をされた動画を作られたのですが、両方を繋ぐナレーションをさせて頂きました。

〈石橋〉の動画では全員別々に録画をしたので、タイムラグが発生しました。そこであえてタイムラグを残して、ライブで演じないと能は厳しいというのを提示するのがテーマでした。「ほら、ズレがあるでしょう、気持ち悪いでしょう」というのをお見せしたつもりですが、能を知らない視聴者はあまりそのズレに気づかれなかったようです。

収録はとても難しく、撮り直しもしました。笛を最初に録音したら、それではうまくいかないことがわかり、太鼓方が心の中で唱歌しょうがを歌いながら演奏して、それに他の楽器や謡を重ねていきました。それでもズレてしまったので、指揮者がいない能の難しくて面白いところを視聴者にわかってもらいたい、という思いがありました。リモート演奏の限界を提示するという感じでした。

芸術の感動を言語化する試み

——子どもの頃に芸術を鑑賞して得た感動を言語化した経験があると、将来、自分の生き方を見つけていく力になるのではないかという説があります。

鶴澤 感じたことを、生まれながらに言語化することが得意な子どももいるかもしれませんが、多くの場合、ある種の能力を鍛える必要があると思います。自分の体験で言うと、子どもの頃に能を見に行くと感想を聞かれるわけです。「どうだった?」「どう感じた?」とか。正直言うとすごく眠くてよくわからなかったこともあります。しかし必ず感想を聞かれるので、具体的にきちんと答えるにはどうするかを考えた結果、自分がもっと一生懸命見ればいいということに思い至りました。そのうちに自分なりの物の見方が鍛えられていくことを実体験として感じました。

能はまだ見慣れていましたが、〈ハムレット・マシーン〉のようなすごく難解な演劇に連れていかれて、これは本当によくわかりませんでした。それでも見終わったら何かしら感想を求められるのがわかっていたので、必死で見まし

た。じつは未だにその舞台のことを覚えているんです。子どもから自然に出てくるものがあればそれが一番なのでしょうが、圧を与えて必死に「見る」ことを鍛えるのもいいと思います。見る側が、受け身でなくアンテナを張り発信しながら見るためには、ある程度、導くことが必要なのではないでしょうか。

終わったあとに感想を話し合うことで、こういう見方があるのかということを知ることができます。話すうちに思考がまとまり、新しい気づきが見つかることもあります。自分の言葉で話すことが楽しいという成功体験も得ることができます。ですので、学校教育の中でこの部分を鍛えるチャンスがもっとあるといいと思います。今は「わかりやすく」ということを重視しているように思いますが、そうではなくて、「もしや自分には感性がないのではないか」と考えるところにまでバーンと落として、そこから鍛えていけばいいのではないかと思います。

——大変有意義なお話をありがとうございます。芸術を積極的に見て言語化するには、脳の中の色々な部位を使わなければならない、それが脳のトレーニングになるわけですね。芸術や芸能を脳トレの素材として扱うことを教育現場に提案したいのです。芸術を見て「素晴らしい」と言う必要はなく、そこから自分が何を学ぶことができるかを掴む回路を作っていくことを、鑑賞の目的にするのがよいのではないかと、思っています。学校の先生がそういう意識で子どもたちを教えてくれるようになるのが理想かと思っています。

鶴澤 感想を言いたいという衝動を持つ、その方向に導くことができればと思います。「楽しかったです」「面白かったです」「頑張ってください」だけではない感想を自分の中から発見し、共有することが面白いことに気づいて頂ければいいですね。

鶴澤 光（うざわ・ひかる）

シテ方観世流能楽師（銕仙会所属）。1979年、鶴澤久の長女として東京に生まれる。祖父の鶴澤雅、母の鶴澤久、および九世観世銕之丞に師事。1982年に仕舞〈老松〉で初舞台。92年に能〈猩々〉で初シテ。以後、〈石橋〉〈乱〉〈道成寺〉を披く。日本能楽会会員。東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻卒業。洗足学園音楽大学および立教大学の非常勤講師。

おわりに

佐々木多門先生と鶴澤光先生は流儀は異なれども、コロナ禍においても自身と弟子に対する稽古を継続し、舞台に対するモチベーションも維持している。

両先生に共通することは、所属する流儀や団体が前向きな考えを持っていることであり、長い歴史を通じて培われた伝統芸能の知恵に支えられているところであろう。そこには「芸の継承」という、伝統芸能に顕著な意識が、本人だけでなく師匠・先輩や所属する団体に感じられる。一方、公益社団法人 能楽協会という能楽師全体の組織が機能しており、近代的な組織のバックアップもあることがわかった。さらに、家族の理解を得ている点も心強いことであろう。

今回に限らず伝統芸能の実演家に取材するとき、「人前で演じる」という仕事に対し誇りと責任を持っていることを常に感じる。1～2年先まで公演の予定が決まっていることも多い。コロナ禍のため公演の中止・延期が相次いだか、それは2020年および2021年のことが多く、それ以降の公演の予定はあまり変更されていないと思われる。そういう意味では長期的な展望のもと、発表の場が設定されており、それを目標に稽古を継続していくということは、モチベーションの維持に大きく作用しているものと思われた。

2021年1月には東京などの大都市に第2回の緊急事態宣言が発出された。コロナ禍の終息の見通しが立たない状況が続いている。引き続き、能楽を含めた伝統芸能の活動について注視したい。

本稿をなすに当たって、取材に応じて下さった佐々木多門先生と鶴澤光先生に心より御礼を申し上げます。また、本研究資料の発表の場を与えて下さった武蔵野大学しあわせ研究所にも感謝いたします。

◆佐々木多門先生・鶴澤光先生に事前に提示した質問事項◆

能楽とコロナ禍

——伝統芸能の伝承を考える観点から、コロナ禍という未曾有の事態において、
能楽師の方たちが、身体性・モチベーションをどのように維持しているか——

1) 緊急事態宣言下の仕事の変化について

具体的に、1月～3月、4月（緊急事態宣言下）以降～、6月（緊急事態宣言解除後）以降～、2021年1月（二度目の緊急事態宣言下）以降～

舞台数、稽古人数、稽古のやり方（方式：対面、リモート等）の変化などについて

2) 自身の稽古頻度について、宣言下によって少なくなった人が59%、通常どおり21%、多くなった人が20%（豊島瑞穂「新しい時代の能楽:It matters!（9）『能楽タイムズ』2021年3月号」に掲載されたアンケート）という結果が出ていますが、ご自身の場合にはどうでしたか？

3) ご自身の稽古の理由についてお教えてください。

4) 素人弟子への稽古方式について変化（例えば、Zoom や Line ビデオ通話の使用など）があったかどうか、あった場合についての内容や対面との指導効果の違いについてお教えてください。

5) 文化芸術の存在、能楽の社会的な基盤について何かお考えになったことがあればお教えてください。

例えば、文化が「不要不急」と言われてしまうことに対するお考えなどをお教えてください。

6) 公演中止・延期が決定した際、気持ちが落ち込むことがおありでしたか。

また、前向きに考えるような努力をなさいましたでしょうか。

7) 公演の開催後、主催者が観客に感染者が出ないかどうか非常に心配したということを経験したことがあります。ご自身の場合は如何でしたでしょうか。

8) 自主公演がなくなった1年間、演能に対する感覚が違って来るようなことがありましたでしょうか。

もしあった場合は、どのように修正等をなさいましたか。

9) 「アートにエールを！東京プロジェクト」などの助成事業に応募・参加しましたか。

10) 森田は、芸術を認識（感動）して、それを言語化する（自分の言葉で表現する）ことが、脳の働きとして非常に有効なトレーニング（広範囲な連携を生む／回答のない問題に対して考える能力）になると考えています。このことに関連して何かご意見や体験などがございましたらご教示ください。

以上